

20 節. 「ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、『主よ、裏切るのはだれですか』と言った人である。」

前回のところにおいて、ペトロは主イエスに「わたしを愛しているか」「わたしの羊を飼いなさい」と三度言われ、続けて、ペトロの殉教を示唆するような言葉（18 節）と「わたしに従いなさい」と言われた。

今日のところでは、もう一人の弟子、「イエスの愛しておられた弟子」（恐らくこの福音書を生み出したヨハネ共同体の代表の弟子）のことが語られている。

この弟子は、最後の晩餐のときに、「イエスの胸もとに寄りかかったまま、『主よ、裏切るのはですか』と言った人である」。13 章 23 節から 26 節にこの記事がある。

「ペトロが振る向くと、あの弟子がついて来るのが見えた」という言葉は、ここでの対話はもはや漁の後の岸辺での食事の場ではなく、ペトロが主イエスに従って歩いている時、あの弟子も主イエスとペトロの後についてくるのが見えたという、途上の出来事として記されている。

「このペトロと『あの弟子』の前後関係は、イエスによって最初に共同体全体の牧者として立てられたペトロと、ペトロの活動から少し遅れてイエスの証人として活躍した『あの弟子』の関係を指し示している。ペトロはイエスとほぼ同じ年代か、少し若い年代と推察され、イエスに召されたときは三〇歳代、六〇年代前半に殉教したときは六〇歳代と見られる。それに対して『あの弟子』は、一〇歳代半ばで弟子となり、その若さのために十二使徒の中には入れなかったが、『イエスが愛された弟子』として、イエスの身近にいた。このような年代の差から、ペトロの殉教後もかなりの期間、この弟子は証言活動を続けることになる。おそらく、ペトロが殉教した六〇年代前半に、この弟子はエフェソに移住して活動し、エフェソ周辺に彼の証言を拠り所とする共同体（ヨハネ共同体）を形成したと考えられる。」（市川）

21 節. 「ペトロは彼を見て、『主よ、この人はどうなるのでしょうか』と言った。」

18 節で自分の将来のことについて言われたペトロは、では、自分のように主イエスの後について来るこの弟子はどうなるのか、と疑問が生じたのであろう。ただ、学者たちは、この弟子のあり方について周囲の人々に知らせるためとか、周りの人々の関心事をペトロに対する主イエスの答えの言葉として語っている、という。

22 節. 「イエスは言われた。『わたしの来るときまで彼が活着していることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の關係があるか。あなたは、わたしに從いなさい。』」

「活着している」と訳されている言葉 (μένω、メノー) は、「留まる」「泊まる」「つながる」と訳されることが多い (1:38, 39、15:4 など)、ヨハネの特愛の言葉。死なないうで地上にとどまることを意味するので、ここでは「活着している」と訳していると思われる。

「わたしが来るときまで」は、ここでは、14 章 18 節のように聖霊を通して来ることではなく、再臨のときである。因みに、初代のキリスト者たちは主イエスの再臨は、自分たちが活着している内に来ると信じていた (I テサロニケ 4 章 15 節以下など)

「わがしが望んだとしても」の「望む」と訳されている言葉 (θέλω、デロー) は、「強く望む」という意味 (17:24 参照)

「主イエスはそれぞれの弟子に、その弟子でなければ果たせない使命を与えておられる。ペトロには、牧者としての使命を果たした後、イエスと同じような姿で神の栄光を現す道を備えられた。それに対して、ペトロの後に活動を続ける『あの弟子』には別の道を用意しておられる。それがたとえ主イエスの再臨の時まで、地上にとどまってその役割を果たすことであつたとしても、それはペトロには關係のないことである。『あの弟子』のことを決めるのは、ペトロではなく主イエスである。ペトロには自分に与えられた使命を果たすことだけを求め、再び言われる。『あなたには何の關係があるか。あなたはわたしに從いなさい。』」 (市川)

「あなたは、わたしに從つて来なさい」。

「これで顯現でのイエスの言葉は終わり、顯現は 20 章 23、29 節のようにイエスの言葉で終わりになる。……。20 章では信じることであつたが、ここでは『われに從え』、ということが最後の言葉となつた。」 (伊吹)

23 節. 「それで、この弟子は死なないうといううわさが兄弟たちの間に広まつた。しかし、イエスは、彼は死なないうと言われたのではない。ただ、「わたしの来るときまで彼が活着していることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の關係があるか」と言われたのである。」

ここでは信じる者たちが、「兄弟たち」と呼ばれている。これは復活の主イエスによって語られていた (19:17)。

「この呼び名はその後信徒たちを呼ぶ名として定着している。すなわち広く教会にあてたものである。イエスの言葉は兄弟たちの間に広まり、再臨までその弟子は死なないうと考えられた。これに対してテキストには注釈が加えられる。まず、イエスはこの言葉で彼が『死なないう』と言つたのではない、と既に広まつた考えが否定される。

すなわち『死なない』と言ったのではなく、『とどまる』と言ったのである。……。
『とどまる』は、まず愛弟子がここで実在の人物であると共に、同時に象徴的な者として見られているのではないか、……。すなわち、イエスの愛する弟子という、イエスに愛される、すなわちイエスを信じる者の存在は世の終わりまで絶えることはないであろうという意味である。もし愛弟子が一回限りの歴史像として示されるのみならば、われわれにとっての意味は減少してしまうであろう。この福音書は、信じる者すべてが愛弟子であると考えを求めているように思われる。このことはたとえば15章の「とどまる（メノー）の用法（15:4, 5, 6, 7, 9, 10, 16）を見ても分かる。それは結局イエスの愛がとどまるということになる（1コリント13:8, 13）。ここではっきりと愛弟子のシンボルとしての形がはっきり示された。このように、この訂正には既に再臨の遅延が考慮されていると言えよう」（伊吹）

24 節. 「これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている。」

ここでヨハネ福音書の著者が、愛弟子であると紹介されている。

「これらのこと」とは、21章のみならず1章からのすべてと考えられるが、それは、恐らく、福音書全体、「21章までが、愛弟子の手によると言われているのであろう」（伊吹）。この場合の「愛弟子」は、既述のように、特定の一人の人というより、主イエスに愛されている弟子、という意味であろう。

「わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている」。19章35節には「それを目撃した者が証しており、その証しは真実である」とある。

「この『わたしたち』は、この『イエスが愛された弟子』の証言を聞いてイエスの弟子となった者たち、すなわちヨハネ共同体を指している。彼らが『イエスが愛された弟子』の証言を真実とし、書きとどめて編集し、福音書として世に出したのである。」（市川）

25 節. 「イエスのなされたことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。」

「この最後の言葉は本来必要のないものではないかと思われる。それゆえ25節は後からの付加なのだろうか。……。20章31節と異なり、そもそもそれが信仰のために書かれたということが欠けており、命という希望の言葉もない。20章30節が適切な言い方であると思われる。このことも21章が後から付加されたものであるという印象を与える。このような誇張は古代の著述に見られるという。核心から外れた誇張のように思われる。」（伊吹）

誇張と思われる言葉ではあるが、この言葉をもって著者は、主イエスが世界にもたらされたものが、表現し尽くせない、伝え尽くせない豊かなものであることを伝えよ

うとしているのではないだろうか。この言葉をもってヨハネによる福音書は終わっている。

* 聖書研究祈祷会は、次週（7月28日）から8月末まではお休みです。
再開は9月1日になります。この日から「使徒言行録」に入ります。